

1 事業名 文部科学省委託事業「体験活動推進プロジェクト」

自然体験活動指導者養成事業

2 必要性

文部科学省の中央教育審議会は答申（平成 19 年 1 月）において、今日の子どもの状況として「直接体験の不足」「生活習慣の乱れ」「希薄な対人関係」を指摘している。多くの体験や規則正しい生活及び友だちとのコミュニケーションが図れる長期における自然体験、集団宿泊体験が文部科学省で見直された。そこで、平成 23 年度より完全実施された新しい小学校学習指導要領では、体験活動の充実が改訂のポイントとして示され、小学校で 1 週間程度の集団宿泊体験を行うことが望ましいことが掲げられた。

長期集団宿泊活動の推進については、平成 19 年度教育再生会議で、「小学校で 1 週間の集団宿泊体験や自然体験・農林漁業体験活動を実施」、同年度、財政諮問会議でも、「小学校で 1 週間の自然体験を実施する」ことが提言されている。また、「教育振興基本計画」（平成 20 年 7 月）では「関係府庁が連携して、小学校で自然体験・集団宿泊体験を全国の児童が一定期間（例えば 1 週間程度）実施できるよう目指すとともに、そのために必要な体験活動プログラムの開発や指導者の育成を支援する」としている。

こうした状況を受け、文部科学省では平成 20 年度から「青少年体験活動総合プラン～小学校長期自然体験活動支援プロジェクト」を実施し、長期にわたる自然体験活動を学校の教育活動として効果的に行うためのモデルプログラムの開発や学校の活動をサポートする指導者の養成に取り組んでいる。そのため小学校が行う 1 週間程度の自然体験活動において、文部科学省の委託事業として本施設が教育効果の高い自然体験・生活体験活動の機会を提供するとともに、指導者も養成することとなった。本施設がプログラムの企画立案や事業評価の助言、活動時の全体指導や活動の様子把握と助言などを行う自然体験活動指導者を養成することは、国の施策として、国立青少年教育施設の使命である。

3 趣 旨

学習指導要領の下、文部科学省がすすめる小学校での 1 週間程度の長期自然体験活動を支援するため、長年体験活動に携ってきた青少年教育施設の教育機能を生かして、その指導者の養成事業を行う。

4 後 援

島根県教育委員会

5 期 日

補助指導者 平成 24 年 8 月 6 日（月）～ 7 日（火）1 泊 2 日

全体指導者 平成 24 年 9 月 15 日（土）～17 日（月）2 泊 3 日



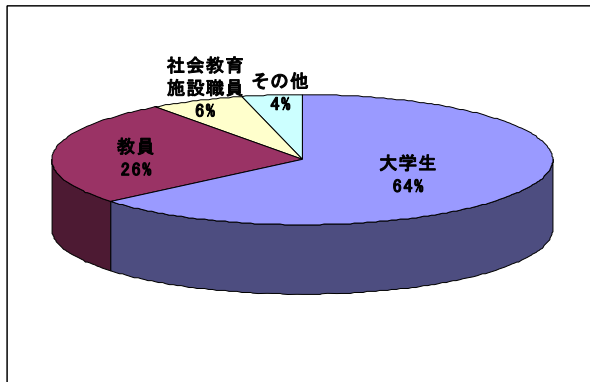
体験活動の意義について学ぶ

6 参加者

(1) 募集対象・人数：青少年教育関係者，学校教育関係者，その他自然体験活動に興味・関心のある方で，小学校長期自然体験活動を支援する意思のある方。各 20 名

(2) 参加人数：補助指導者 24 名（修了者 24 名）
全体指導者 30 名（修了者 30 名）

(3) 参加者分析：本事業で全体指導者 31 名，補助指導者 23 名を養成した。また，本施設の教育事業である「ボランティア活動入門セミナー」や「大人の野外活動実践講座」も補助指導者認定講習に位置づけ，参加者の内，希望者 62 名を補助指導者として認定した。その内訳は大学生 64 名（64%），教員 26 名（26%），社会教育施設職員 6 名（6%），その他 4 名（4%）で，平均年齢は 27.3 歳と青年の参加者が多かった。（重複登録者あり）



参加者内訳



様々な職種の参加者による話し合い

(4) 参加者地域：補助・全体指導者登録者合計

地域	島根	広島	鳥取	岡山	京都	計
人数（人）	92	2	4	1	1	100

7 講師等

近藤 剛 氏（鳥取短期大学准教授・鳥取県キャンプ協会会長）
河野 宏樹 氏（環境教育事務所 Leaf 代表）
澤田 和憲 氏（日本赤十字社 島根県支部）
河野 操 氏（日本赤十字社 島根県支部）
国立三瓶青少年交流の家 企画指導専門職



救急救命講習

8 参加費 補助指導者 2,450 円（食費 4 食分・シーツ等洗濯料・保険料）
全体指導者 4,150 円（食費 7 食分・シーツ等洗濯料・保険料）

9 事業の内容

(1) 事業の特色

「学校教育における体験活動の意義」「教育課程と体験活動の関連性」「安全管理」「プログラムの企画立案」「自然体験活動の技術」「体験活動の指導方法」等、文部科学省が示す共通カリキュラムに沿って、本施設の職員や講師が実践的な講義・演習を行う。演習では、大山隠岐国立公園内に立地し、自然豊かな三瓶山のフィールドを活用し、本施設の周辺で野外炊飯や自然観察等の指導方法を習得する。



林の中での研修

(2) プログラムデザインと企画のポイント

- ・ 講義・演習「体験活動の指導方法」では、研修会参加者が子どもたちの立場で自然体験をするだけでなく、小学校での4泊5日の長期自然体験プログラムを企画・立案する指導者の立場で実践的な研修をする形態とした。
- ・ 座学中心ではなく参画型のプログラムになるよう本施設周辺の豊かな自然を活かして野外で植物等を教材にした講義を聞いたり、参加者間の話し合いや発表をしたりするプログラムになるようにした。
- ・ 安全管理の講習は、定着しやすいように5時間のうち2時間はワークショップ形式で、本施設における看板プログラムである「登山」を題材として実践的に行った。
- ・ 講義・演習「プログラムの企画立案」では、企画立案グループごとに考えた小学生を対象として立案した4泊5日のプログラム計画案の発表の場を設け、参加者がそれぞれの企画立案グループの計画案のアイデアを互いに共有できるようにした。
- ・ 体験の「やりっぱなし」とならないよう実際にふりかえりをし、各プログラムにおいてふりかえりのもち方について参加者で話し合った。



プログラム プレゼンの様子



全日程を終了し、笑顔の参加者



グループでのふりかえり「ビーイング」

(3) 広報のポイント

- ・ 教職に就いたときに、自然体験の実践的な指導ができるように教育学部の大学生に参加を呼びかけた。
- ・ 大学生に対しては、本施設の法人ボランティアや島根県出雲市立今市小学校のセカンドスクールのボランティアにチラシを配布し、参加を呼びかけた。島根大学教育学部における必修教育課程「1000時間体験学修」に本事業を認定してもらえるようにして、教育学部学生が参加しやすいようにした。
- ・ 大学生を対象とした本施設の教育事業「ボランティア活動入門セミナー」「さんべ夢ステージ」等で子どもたちにとって長期自然体験の重要性と全体指導者の養成について説明し、参加を呼びかけた。
- ・ 広範な地域からの参加につなげるために島根県内だけでなく中国地方の青少年教育施設や島根県外からの本施設利用者などに呼びかけた。



グループで考えた詩を発表する

(4) 日 程

補助指導者 平成 24 年 8 月 6 日（月）～8 月 7 日（火）

月日 時間	8 月 6 日（月）		8 月 7 日（火）
	A	B	合同
6:30			起床
7:40			朝食：食堂 清掃
9:00	受付		宿泊室片付け・自主活動
9:30	開講式		
10:00	〈講義演習Ⅰ〉 プログラムの企画立案①	〈実習Ⅰ〉 登山の実際	〈講義Ⅰ〉 学校教育における体験活動の意義
12:00	昼食・休憩		昼食・休憩
13:00	〈講義演習Ⅱ〉 プログラムの企画立案②	〈実習Ⅱ〉 野外炊飯指導の実際	〈講義Ⅱ〉 教育課程と体験活動の関連性
15:00	休憩		閉講式
15:30	〈講義演習Ⅲ〉 プログラムの企画立案③		解散
17:30	夕食・休憩		
19:00	〈講義演習Ⅳ〉 プログラム発表		
22:00	入浴		
23:00	就寝		

全体指導者 平成24年9月15日(土)～9月17日(月)

月日 時間	9月15日(土)	9月16日(日)	9月17日(月)
6:30		起床	起床
7:00		朝のつどい・清掃・朝食	朝のつどい・清掃・朝食 退所点検
9:00	受付	〈講義演習Ⅱ〉 体験活動の指導法②	〈実習Ⅱ〉 救急救命法
9:30	開講式		
10:00	〈講義Ⅰ〉 学校教育における体験活動の 意義		
12:00	昼食・休憩		
13:00	〈講義Ⅱ〉 教育課程と体験活動の関連性	〈実習Ⅰ〉 自然体験活動の技術	〈講義演習Ⅳ〉 プログラムの企画立案②
15:30	〈講義演習Ⅰ〉 体験活動の指導法①		ふりかえり・閉講式
17:30	夕食, 休憩		
19:00	〈講義Ⅲ〉 安全管理		〈講義演習Ⅲ〉 プログラムの企画立案①
21:00	入浴・休憩		
23:00	就寝	入浴・休憩・就寝	

(5) 内容, 講師

講義 学校教育における体験活動の意義

鳥取短期大学准教授 近藤 剛 氏

- ・青少年を取り巻く社会的環境や青少年の現状等を踏まえ、青少年の現代的課題と青少年問題について理解する他。

講義 教育課程と体験活動の関連性

鳥取短期大学准教授 近藤 剛 氏

- ・学習指導要領における体験活動の位置づけを理解する他。

講義 安全管理

国立三瓶青少年交流の家室長 小西 勝典

- ・体験活動における安全管理の基本的な考え方を理解する他。

講義・演習 体験活動の指導方法

環境教育事務所 Leaf 代表 河野 宏樹 氏

- ・人間関係をつくることや環境保全に興味・関心をもつことなど、目的に応じた指導法を理解する他。

講義・演習 プログラムの企画立案 国立三瓶青少年交流の家企画指導専門職 小畑 隆夫
・自然と人，社会，文化のかかわりや青少年教育施設との連携，地域の人材の活用など，企画立案時に留意することを理解する他。

実習 登山の実際・野外炊飯指導の実際 国立三瓶青少年交流の家室長 小西 勝典
・自然の中で生活・活動を行う上で必要とされる基礎的な技術と安全管理を習得する。

実習 自然体験活動の技術 環境教育事務所 Leaf 代表 河野 宏樹 氏
・自然の中で生活・活動を行う上で必要とされる基礎的な技術を習得する。

実習 安全管理（救命救急法） 日本赤十字社 島根県支部 澤田 和憲 氏
河野 操 氏
・救急救命法の実習（AEDの使用方法を含む）を行う他。

(6) 運営のポイント

- ・ 図鑑を使用して学習現場で植物と対比して観察できるようにしたり，長期自然体験活動を実施することが多い小学5年生の理科の教科書も会場に準備し，教科を意識した企画立案をしやすくしたりすることによって，学びが深まる場の設定を行った。
- ・ 講師に参加者の体験活動や指導の経験値のばらつきについて事前に伝え，講義や実習・演習を工夫していただき，経験の有無にかかわらず，意欲をもって取り組めるようにした。
- ・ より多くの人に自然体験活動の門戸を開いてもらおうと考え，本施設で行った教育事業「ボランティア活動入門セミナー」「大人の野外活動実践講座」参加者の中から希望者を補助指導者に登録した。
- ・ 実際に指導を担う小学校教職員も対象として考え，島根県内の小学校に働きかけたところ，出雲市立今市小学校が，職員研修の一環として本事業に参加された。自然体験活動に取り組む上で，非常に有意義であったという意見が多数出された。

(7) 安全管理のポイント

- ・ 野外実習については，事前に講師とともにフィールドを踏査し，試行的に実施するとともに，直前にも活動場所の实地踏査を実施して安全確認を行った。
- ・ 野外に出かける場合は，無線と携帯電話の両方を携行し複数の連絡手段を確保した他，救急靴も携行し事故や怪我に備えた。

(8) アンケートの主な記述

- 学校教育と自然体験活動との連携について学ぶことができ，参考になった。
- 「体験が真の学びとなる」ということに改めて気づかされました。特に「自信，達成感」というところが心に残っています。人が生きていく上での根幹となる部分だと思うので，そのねらいを意識して活動を具体化していきたいと思います。

- プログラムに対する意識が変わりました。どんなねらいで、どういった子に育てたいかなどプログラムを組むために何を大切にするか勉強になりました。
- プログラムの企画立案の時間を大切に、今現在の子どもたちの実態をふりかえり、何が課題として考えられるかを明確にしました。ねらいがはっきりしたことで達成するための活動がスムーズに組めました。今後の生活、学習を考えていく上でも、そのアプローチの仕方がはっきりしてきたように思いました。
- すぐくためになり、目標としていたスキルアップの面でも、とても良い経験をさせていただきました。もし要望があれば、自然体験活動に積極的に参加していきたいです。

10 成果と今後の課題

<成果>

- ・ 島根大学との日頃の連携成果として、大学生の参加者が多くを占めたことで、次代のリーダーとしての指導者を64名養成することができた。
- ・ 県内だけでなく県外への他施設への広域広報の結果、県外から8名の参加があった。
- ・ 事後アンケートの評価は合計で「満足」が78%、「おおむね満足」が22%で、2区分評価の満足度は100%であった。ふりかえりでの感想も「世代を超えた出会いがあり、その出会いでさらに学びが深まった。」「あらゆる場面で発見があったので、勉強になり参加してよかったです。」などがあり、講師や参加者との出会いを通して自然についての新たな発見があったことが、満足度の向上につながったと考える。
- ・ 全体指導者としての登録者が本施設で4泊5日の長期自然体験学習を実施している出雲市立今市小学校の「セカンドスクール」において、野外活動の準備、子どもたちの安全管理、生活指導などの補助者として活躍につながっている。

<課題>

- ・ 平成23年度と同様、研修会の期間を平成22年度の3泊4日から2泊3日に縮めたことで「2泊3日だったので参加できた。」という評価を得た反面、「短時間に詰め込みすぎと感じます。余裕あるスケジュールでしっかり習得したいです。」という評価もあった。
- ・ 全体指導者を養成しても学校側で周知されていないため、活躍の場が少ない。より多くの学校が自然体験活動の実施をするためにも、本施設を利用する団体に全体指導者の活用について広く呼びかけていく必要がある。

11 普及計画・普及実績

- ・ 本事業の取組みの様子を報告書（全体報告書）にまとめ、教育委員会や関係機関（島根県内全ての小学校や、全国の青少年教育施設等）に情報発信することで、本施設や機構が行っている自然体験活動指導者養成研修の成果を広め、理解を図る。
- ・ 事業実施後、事業内容をホームページに成果の公表として掲載した。

(担当 小畑 隆夫)